

豊田市
郷土資料館
だより
No.41

Toyota City Museum
Of
Local History



堤村絵図(原田 和範氏蔵)
※特別展「川をめぐる暮らし」
にて紹介いたします。

目次

・ 矢作川の築	2
・ 古文書紹介	3
・ 愛知県史編纂民俗調査から	4
・ とよたの郷土芸能	5
・ 近代化遺産総合調査	6
・ 体験学習レポート・六鹿邸のこと	7
・ 文化財シリーズ・資料館ニュース	8

矢作川の^{やな}築

築漁は伝統的な鮎漁の一つで、産卵にむかって川を下る鮎の習性に基づいて考案された漁法であり、古くは弥生時代にまで遡るといわれています。

川を堰き止め、水流を1～3間幅位の一ヶ所に集め、竹で編んだ簀のうえに落とし、下る鮎を受ける仕掛けで、「待ち」の漁です。立地としては比較的川幅があり、流れの緩やかな岩場の少ない場所が選ばれ、ほぼ毎年同じ位置に掛けられます。築の構築と築漁を「築を掛ける」、「築を打つ」、「築を刺す」とも呼ばれます。

矢作川での築漁は『寛政重修諸家譜』（巻1154、56、57）穂積氏・鈴木重次、信光、政重の記述によれば既に江戸初期に巴川で鈴木家に、築による漁が公認されていたことが明らかになっています。鮎運上や築をめぐる紛争の記録類も散見され築漁の一端を伺うことができます。

明治16年の愛知県収税課による「明治十六年度愛知県地方税精算明細表」によると県内での築掛けは西加茂郡7、東加茂郡10、北設楽郡4、額田郡1、東春日井郡2ヶ所、合計24ヶ所あり、北設楽郡の4ヶ所が豊川水系であったとしても、東西加茂郡、額田すなわち矢作川流域に集中していたことがわかります。当時、築漁が盛んであったことをものがたっています。しかし近代化のなかで、用水やダム建設によって鮎の溯上が減少し不漁となり、昭和にはいり多くが衰退したと考えられます。当時の鮎の保存法は冷蔵技術が未発達であり、ほとんどが塩漬けと焼いて乾燥する方法でした。製氷技術が導入されると生魚の状態出荷が可能となり、氷詰めにして夜間自転車で名古屋方面に出荷されました。

今日、矢作川各所で掛けられる築はもっぱら観光用の築となっています。生業としての築漁が衰退するなかで、昭和30年代から、築場の小屋で客に鮎料理を食させる観光用に復活してきました。今日では水質の悪化で漁に及ばず、逆に養殖魚を持ち込んで客に供しているのが実情のようです。野趣にとみ涼を求める夏の風情にはかせない景観となっています。

矢作川流域には今夏、10箇所に築が掛けられています。本流筋では下流から豊田市・広瀬、藤岡町・川口、旭町・小渡、上矢作町・小田子、同・澄ヶ瀬、巴川筋では豊田市・松平、足助町・白鷺、同・一の谷、下山

村・平瀬、乙川筋では額田町・男川築です。概ね7月から10月の夏から秋にかけて営業されています。平成12年9月の東海豪雨で水没し、休止している築も数ヶ所あります。築の構造は基本的には共通しており、概ね本体である簀^{すのこ}の設置と川の堰き止めの二工程にわかれます。伝統的な構築方法として本体は蛇籠と呼ばれる目の粗い大きな籠を川底に並べ石を詰めて簀を受ける骨組みを太い丸太で組みます。次に割竹、あるいは丸竹を整然と並べて簀をつくり、先端に築の要であるセイタと呼ばれる角材を固定します。堰き止めは先端から両岸に開く扇形に、丸太を組んで拵えたウシとよばれる木組と蛇籠、簀、枝付きの雑木等で造ります。近年は蛇籠や丸太材に代って鉄骨で本体を築くところや、簀の一部に合成樹脂を用いて掛けられる場合もありますが、素朴で野趣豊かな伝統的漁法を見ることができます。なお矢作川の築について今秋11月の特別展「川をめぐるくらし」で報告を予定しています。

（松井孝宗）



広瀬築



白鷺築

うのくびかいさく
浦野家文書(矢作川鵜首開鑿に付)「建議書」(明治26年)

～ 矢作川治水事業の一頁 ～

矢作川は、流域の人々に多くの恵みを与える一方、度重なる洪水で人々の生活を脅かしてきました。江戸時代では曲尺^{かね}の手にまがった堤の造成や、町・城の移転がありました。しかし、矢作川流域の人々は明治以降も毎年洪水の心配をしながら暮らしていました。

こうした状況の中、明治26年(1893)に「矢作川流域鵜首開鑿工事之義付建議書」が愛知県知事時任為基に提出されました。これは矢作川の治水事業にほかありませんが、実際にはどんな内容なのかこれまでわかっていませんでした。しかし今回市内から見つかった2種類の「建議書」からその内容を知ることができます。この建議書はいずれも下書きか控えと思われますが、一つは提出者浦野錠平はじめ3名に賛同者30名の連名で愛知県議会議長小塚逸夫宛のもの、もう一つは愛知県議会議長小塚逸夫から内務大臣伯爵井上馨宛のものです。この2つの建議書はいずれも治水事業についての建議ですが、内容で大きく違った点があります。それは前者の愛知県議会議長宛のものは庄内川、矢作川、豊川の各川の状況を説明し河川改修事業の必要性を述べているのに対して、後者の内務大臣宛のものは、明治22年挙母町の水害の被害状況を具体的に述べて矢作川鵜首開鑿工事を要請している点です。

推測するに、前者の庄内川・矢作川・豊川は尾張・西三河・東三河のそれぞれの大川です。治水事業の実施を県議会へ提出するために賛同者を増やす目的でそれぞれの大川を例に挙げたもので、水災のために治水策の必要性が急務であったのは矢作川だったのではないのでしょうか？



そのために内務省に出された建議書では矢作川の実態を訴える、より实际的なものになったのだと考えられます。

内務省宛の建議書を見てみると、これまでの挙母町は「天保16年ヨリ明治22年二至158年間、決提ノ度数36回ニシテ即チ5ヶ年間1回罹災」と洪水の多さを述べ、続いて明治22年の洪水では「浸水家屋365戸、平均1戸ニ付其損害金30円」と記しています。さらにこれまでは治水策として「堤防ノ増築」「市街ノ移転」が行われてきたが「防水除外の術」は無かったとした上で本流の川幅に比べれば半分にも及ばない「鵜首」を開鑿して水を流れやすくすることを説いています。これは明治用水が出来、さらに横断堰堤^{えんてい}(完成は明治34年)の建設のためにこれまでに増して洪水が危惧されたのでしょう。



添えられた図面には川幅の狭い鵜首とすぐ下流に明治用水の導水堤が描かれ当時の状況がうかがえます。加えて浸水地として梅坪村・挙母町・根川村の鵜首付近までと対岸の流域が黄色く塗られ広い範囲が低い土地であることが示されています。またこの図面につけられたメモ書きの「矢作川通鵜ノ首開鑿工事仮目論見」からは長さ340間、およそ14,748坪3合を開鑿する計画で22,122円45銭(但1坪に付金1円50銭宛)かかる予定であることがわかります。しかし実際にはその後どのような展開となったのか、鵜首開鑿工事の記録を見つけることはできませんでした。(伊藤智子)

特別展「川をめぐる暮らし」を開催！

平成14年11月2日(土)～12月15日(日)

観覧料200円(70歳以上及び中学生以下無料)

※本特別展にて上記資料を公開します。

愛知県史編纂民俗調査から

愛知県は、現在、「愛知県史」の編さんを行っています。この県史は原始・古代から現代に至るまでの愛知県の歴史的発展過程を明らかにしようとするものです。通史編、資料編、別編をあわせて60巻からなる壮大な刊行物となる予定です。



花園地区での調査

この度、この県史調査の一環として、7月に豊田市内の花園地区と九久平地区の2カ所で民俗調査（聞き取り調査）が行われました。調査には、調査員の先生がそれぞれの地区を訪れ、地区からは高齢者の皆さんが参加されました。

聞き取りの内容は住生活、信仰、民俗芸能、食生活、口承文芸、衣生活、社会生活、年中行事、人生儀礼等、多岐に渡るものでした。ここでは、聞き取りの中からその一部を紹介します。

花園地区

（川に関係すること）

現在は河川改修されていますが逢妻男川はよく氾濫していたし、決壊もあったとの話が伺えました。また、川の利用ということでは用水路としてのほかに水運の話が興味深いものでした。

逢妻男川は今よりも水深が深く、碧南や西尾から荷を運ぶ船が上ってきたそうです。現在の川の状態では想像できませんが、大きな役割を果たしていた川であることがわかります。

（生業に関すること）

花園地区は現在も周辺には農地が広がっていますが、以前から農業を生業とする人が多く、それに関する話が多く聞くことができました。

- ・ヒヨ（日雇）で安城、刈谷、知立まで田植えに行った。
- ・神社で雨乞いの祈禱をした。
- ・農休み...田植えが終わったあとに1日、農休みがあった。

等、現在は企業的農業の先進地であるこの地区で見られなくなった当時の様子が伝わってきました。

畑ではお茶や桑畑になっているところが多いようでした。お茶は文化・文政の頃からこの地に伝わっている（高岡町誌）ほど古い歴史があり、このあたり一帯が生産地であった様子が伺えました。

九久平地区

（水運に関すること）

- ・九久平には港やドバ（土場）があり、巴川を岡崎からの船が荷を運んで来た。
- ・ドバからは製材した船板を筏に組んだり、足助から運ばれた竹や松平の竹を筏に組んで流送したりした。

等、巴川の水運と足助街道の接点となる九久平の特徴的な話が聞くことができました。

（年中行事に関すること）

餅つき、年越し、正月、節句、盆の他にも庚申さん、お釈迦さん、弘法さんやおためし、お地藏さん、祭などの宗教関連の年中行事が多彩に行われていた様子が伺えました。

おためしでは、以前は子ども相撲や弓等が行われ、庚申さんのお祭りでは富くじや茶碗市が行われていたとのことでした。



九久平地区での調査

とよたの郷土芸能

－天王祭りの芸能－

とよたの夏の代表的な祭りに天王祭りがあります。別に、お天王さん、祇園祭り、津島祭りなどともいわれ、庶民の生活に身近なお祭りのひとつです。祭神は牛頭天王あるいは須佐之男命ですが、ともに疫病除けの神であり、同一神として見られています。

天王祭りの主役は火であり、提灯や行灯、三界堂が作られ、ロウソクのやわらかな灯のなかで、子供たちが線香花火や爆竹に興じ、疫病退散を願います。

日が傾き、あたりが薄暗くなってくると、笹竹に提灯をぶら下げた子供連れの人たちが境内に集まってきます。神事に続いて、子供たちに花火が配られ、チャラボコの威勢のよい太鼓が打ち鳴らされます。

かつては、市内随所で見られた祭り囃子、チャラボコですが、その多くのものが消滅してしまいました。今回は天王祭りの奉納芸能として行われている西広瀬町の西広瀬打囃子保存会と御立町の御館囃子保存会を紹介します。



西広瀬の打囃子



由 来 いつの頃から始まったものか定かではありませんが、矢作川水系のチャラボコであったものに、打囃子の曲が導入されたものと思われます。地元ではチンデコといい、昔は囃子車に太鼓をくくりつけ、町内を回りましたが、現在は八剣神社の農村舞台を使って、子供たちを中心に演奏しています。

保存団体 西広瀬打囃子保存会（会長 鈴木倫保）
 会員 大人3名、小学校4年～6年

演奏場所 西広瀬町津島神社 農村舞台
 天王祭り7月第2日曜日

使用楽器 大太鼓 1本、こばち（金胴）2本
 笛（篠笛） 多数

曲 目 6曲
 新ばやし、おさる、みつがえし
 しゃぎり、新の1、新の2

御立鷲取神社のチャラボコ



由 来 天保元年(1830)に鷲取神社に奉納されたのが、始まりとされています。これまでに2回中断し、昭和53年に保存会を結成しました。囃子車に太鼓をくくりつけ、境内で演奏しています。日進市の岩崎太鼓囃子は御立から伝わったものといわれています。

保存団体 御館囃子保存会（会長 山田悦司）
 会員 大人13名

演奏場所 御立町 鷲取神社 囃子車
 大祭 11月3日、春祭り 4月29日
 天王祭り 7月15日

使用楽器 大太鼓 1本、こばち（金胴）2本
 笛 なし（昭和48年にはなかった。）

曲 目 6曲
 四、いれごと、くずし、つつみ
 ぎおん、（どろ）

（蟹 一夫）

「愛知県近代化遺産(建築物等)総合調査」について

平成14年度から平成16年度の3ヵ年をかけて、愛知県教育委員会が事業主体となり、「愛知県近代化遺産(建築物等)総合調査」(以下、総合調査と言います)が実施されます。豊田市郷土資料館では、この総合調査に協力し、その第1次調査として、豊田市内における近代産業遺産の所在の確認調査を8月から11月にかけて行います。

近代化遺産とは、主として明治以後の技術によって造られた、または江戸時代末期からおおむね昭和20年までに造られた、産業・交通・土木に関する構築物(付随する各種の構築物、工作物を含む)のことを指します。捉え方によっては、近代化遺産は、わが国の近代化に重要な役割を果たしてきた「技術」の記念碑とすることができます。

近代産業の先進県として、愛知県には相当数の近代化遺産があると言われています。しかし、これまで愛知県内では近代化遺産について、所在確認から写真撮影・実測図作成・沿革の調査・保存の可能性の調査などを含む、総合的な調査は行われていませんでした。

総合調査は、県内に所在するすべての近代化遺産を対象として、『「産業立県・愛知」のルーツに迫ります』を合言葉に、愛知県の産業に関する歴史的遺産を後世に伝えていくための基礎資料の作成を目指しています。第1次調査で確認された近代化遺産については、その後愛知県が委嘱した専門の調査員がさらに詳細な調査を行う予定です。そして総合調査の結果は、県内の近代化遺産の状況を把握するとともに、今後の文化財保護施策の推進に役立てられます。

それでは豊田市内には、どれだけの近代化遺産が存在するのでしょうか？

豊田市郷土資料館では、総合調査に先駆けて、平成14年7月20日～9月1日の期間、「とよたの近代産業遺産を訪ねる」と題した企画展を開催しました。

ここでいう近代産業遺産とは、建造物を主とした近代化遺産を含む、より広い範囲の産業に関連した遺産を指す言葉です(用語については、前号の郷土資料館

だよりをご参照ください)。この企画展の準備段階で参考とした資料(平成5年に実施された豊田市内の近代化遺産の所在調査結果)では、豊田市内に所在する近代化遺産として、56件が挙げられています。この数は、名古屋市を除く県内の市町村の中で、豊橋市などに次いで最も多い部類に入ります。

また今回の企画展で紹介した遺産には、「寿町のダルマ窯」や「^{かなやした}金谷下^{かいきよ}開渠」など、新たに確認されたものもあり、市内にはまだ知られていない近代化遺産が眠っている可能性があります。もし皆様のお近くに昭和20年以前に造られた建築物や設備がありましたら、ぜひ豊田市郷土資料館へ情報をお寄せください。



寿町のダルマ窯(大正時代に築造された瓦を焼く窯)



金谷下開渠(大正時代に築造された鉄道橋)

体験学習レポート

○夏休みこども講座

郷土資料館では8月に夏休みこども講座、『親子で勾玉づくり』『親子で土偶づくり』を開催しました。参加者募集の直後から応募が殺到し、市民のみなさんの関心の高さがうかがえました。盛況だった講座の様子をレポートします。

勾玉は、原始・古代の装飾品です。ガラス製、土製のものもありますが、今回は「滑石^{かつせき}」という非常にやわらかい石を使用しました。紙やすりで十分削ることができる石です。四角い石材にそれぞれ思い思いに勾玉の形を書いて錐で紐を通す穴を開けます。あとは紙やすりでどんどん勾玉の形に削っていきます。最後の仕上げには耐水性の紙やすりを使って水の中で磨きます。

参加者全員、1時間30分ほどでつるつるに磨かれた勾玉を手にすることができました。

土偶は、縄文時代に作られた土人形です。妊娠した女性を表現したものが多いことから、子孫繁栄や五穀豊穡の祈りが込められたものと考えられています。土偶づくりには陶土を使用して作成を行いました。最初

にどんな形の土偶が全国から見つかっているのかパネルや実物で紹介をしました。その後、自由な発想で思い思いの土偶を作成してもらいました。

本物そっくりの土偶、マンガのキャラクターのような土偶などバラエティーに富んだ土偶が出来上がりました。

体験を通して歴史に触れることができ、夏休みの良い思い出になったようです。



水の中で勾玉を磨きます

しょうわ とよたの小話

む しか てい

六鹿邸のこと

高岡地区に「六鹿邸」という市指定の文化財があります。六鹿邸は明治45年頃にこの地域の豪農である六鹿清七によって建てられた、木造瓦葺鴨居造りの豪邸です。六鹿氏の後裔は京都に在住しており、主のいないままになっていたため、昭和22年に高岡村が高岡中学校の特別教室として六鹿家より譲り受けました。当時は戦後の社会教育として公民館運動が盛んになった時期で、昭和23年から高岡公民館として利用することとなり、寄合いのほか講演会、修養会などが盛んに行われるようになりました。また、中学校卒業後の女子は洋裁修養に都会へ出ていく傾向が大変強く、「村内の娘を外へ出さずに腕に職をつけさせたい」という杉浦隆一村長たつての肝煎りで、昭和24年4月1日に高岡村立和洋裁学園を開校、当時入手が難しかった豊田製

の輸出用ミシン20台を購入し、専任教師3名、助手2名をおきました。昭和24年当時は味噌1kgあたり25円47銭の時代でしたが、授業料は洋裁月額150円、和裁月額100円で、速成科150日、普通科300日、研究科400日という通年制でした。学校の形式に囚われないで専ら実技の上達を目的にし、随時入学ができ、単位を修得すれば卒業ができるシステムになっていましたが、途中結婚退学者が多く、在籍者数は常に変動がある状態でした。また昭和30年4月1日には高岡村立高等家政学校となり、地元高岡だけではなく近隣の三好や上郷などからも生徒を受け入れ、昭和38年3月に閉校するまでの15年間に、卒業生930名がはばたいていきました。

(昭和史人物調査記録及び高岡村誌より)

寺部城は、矢作川が大きく蛇行する高橋の上流約400mの台地の西端に築かれた城で、現在公園として整備され市民の憩いの場となっています。

寺部城は在地の小豪族であった鈴木氏が、文明年間(1469～1487)に築いた居館がはじまりといわれています。寺部鈴木氏は高橋荘地頭の中条氏の衰退とともに力を増し、南方の松平氏ともしばしば抗争を繰り返しました。やがて西三河に今川義元の影響が及ぶようになると、ある時は今川、ある時は織田・松平に属しその保身をはかっていました。永禄元年(1558)2月、義元は松平元康(徳川家康)に寺部城攻撃を命じました。



文化財シリーズ

41

寺部城址

これは家康の初陣となりました。義元が桶狭間に散った後、自立の道を歩もうとした鈴木氏は、永禄9年(1566)信長の家臣佐久間信盛に矢並城に追いやられ、寺部城は落城となりました。

その後、家康の家臣で槍の名手として名高い渡辺半蔵守綱が、尾張藩付家老となり、寺部に陣屋を置きました。この陣屋は鈴木氏時代の城跡がある程度利用して築かれたと考えられます。渡辺氏の陣屋は幕末まで存続し、そのまわりに家中屋敷と町屋敷が建ち並んだミニ城下町的な発展をとげました。陣屋東方にある浄土真宗守綱寺は渡辺家の菩提寺で、墓所に歴代の墓があります。

資料館NEWS

「絹本著色渡邊半蔵守綱像」特別公開

平成13年度に行われた修復作業が終了したため、6月15日(土)～7月14日(日)に県指定文化財の「絹本著色渡邊半蔵守綱像」を特別公開しました。渡邊半蔵守綱は徳川家康に仕え数々の功績を残した人物で、画像は寺部町守綱寺が所蔵し、豊田市郷土資料館が預っています。期間中は348人の方にご覧いただきました。

実習生受入れ

6月20日(木)～6月28日(金)に博物館学芸員を目指す学生9名が郷土資料館で実習を行いました。資料の分類、取り扱い、写真撮影の仕方、展示実務など資料館で行われている業務を学習しました。

刊行物のご案内

◆『竹村風土記』 1,800円
竹村風土記編集委員会より『竹村風土記』が刊行され、竹村についてのいわれ、神社仏閣、生活文化、産業、先人達、伝説、昔話、自然など様々なことについて紹

介されています。

◎お問合せは鈴木元勝(0565-52-2909)までお願い致します。

◆豊田史料叢書『鈴村家文書 上』 2,600円

挙母藩城下東町で庄屋を三代にわたって世襲し、苗字帯刀を許された鈴村家の史料を収録しました。豊田史料叢書では初の町屋史料です。

◎ご希望の方は郷土資料館までお問合せ下さい。郵送販売もしております。

お詫びとお知らせ

◆39号資料館ニュースで紹介いたしました逢妻史跡研究会会長近藤三善氏の連絡先は32-4002の誤りでした。また40号古文書紹介のタイトルは菅沼家文書の誤りでした。大変ご迷惑をおかけし申し訳ございません。



利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.41■

平成14年9月15日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com